View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Gunma University Academic Information Repository

# 教育学部GFL育成プログラムの現状と今後の課題

## 2018年度のアンケート結果分析を踏まえて

山 田 敏 幸・鈴 木　　豪

群馬大学教育実践研究　別刷
第37号　185～194頁　2020

群馬大学教育学部　附属学校教育臨床総合センター

群馬大学教育実践研究　第37号　185～194頁　2020

# 教育学部GFL育成プログラムの現状と今後の課題
## 2018年度のアンケート結果分析を踏まえて

山　田　敏　幸[1)]・鈴　木　　豪[2)]

1）教育学部英語教育講座
2）教育学研究科教職リーダー講座

# Future Issues for GFL Program at the School of Education
## Analysis of the 2018 Questionnaire

Toshiyuki YAMADA[1)] , Go SUZUKI[2)]

1）Department of English, School of Education
2）Department of Professional Teacher Education, Graduate School of Education

キーワード：教育学部、GFL、アンケート分析
Keywords : School of Education, GFL, Questionnaire Analysis

（2019年10月31日受理）

## 1　はじめに

本稿は、平成27年（2015年）度からスタートした、教育学部におけるグローバルフロンティアリーダー育成プログラムについて、これまでの取り組みを振り返るとともに、今後の課題と改善策について検討する。昨今、「グローバル化」の名の下に、社会のあらゆる側面において国際化が進んでおり、教育も例外ではない。日本の教育においては、外国籍居住者の増加により外国籍児童・生徒への教育の充実、また外国人労働者の増加により労働者への日本語教育の充実などが喫緊の課題である。そのような課題に向けて、教育学部においては、グローバルな視点を持ち、教育の諸問題に対応できる学生の育成が重要である。

まず、次節で、群馬大学全体における、地球視野に立ち世界的に活躍できる人材であるグローバルフロンティアリーダー（GFL）の育成プログラムについて、これまでの経緯を振り返る。第３節では、教育学部GFL育成プログラムを紹介し、第４節で、実際にプログラムに参加している学生へ実施したアンケートの結果を分析する。第５節では、アンケート結果の分析を基に、教育学部におけるGFL育成プログラムの今後の課題と改善策を検討し、第６節で本稿をまとめる。

## 2　これまでの経緯

群馬大学全体におけるグローバル人材創出プログラムについて、これまでの経緯を振り返る。まず、平成21年（2009年）度に文部科学省の委託事業「理数学生応援プロジェクト」として、理工学部（当時工学部）において「理工系フロンティアリーダーコース（FLC)」が始まった。「理数学生応援プロジェクト」とは文部科学省において平成19年（2007年）度から実施され、その目的は「理系学部を置く大学において、理数に関して強い学習意欲を持つ学生の意欲・能力をさらに伸ばすことに重点を置いた取組を行うことにより、将来有為な科学技術関係人材を育成する」ことである[1]。平成21年（2009年）度、工学部で「高大

産連携による工学系フロンティアリーダー育成プログラム」として採択され、フロンティアリーダーを「企業・研究機関の研究開発職・研究職において、独創的リーダーとして研究を展開し、活躍できる人」と定義し、「理数分野に関して高い資質、学習意欲をもつ学生を選抜し、工学系フロンティアリーダーコース（FLC）において様々なプログラムに参加させることにより、将来、工学系のフロンティアリーダーとなるよう育成すること」を目的とした[2]。

次に、工学系フロンティアリーダーコース（FLC）が平成24年（2012年）度をもって終了したことを受け、翌平成25年（2013）年度より、大学独自の取り組みとしてグローバルフロンティアリーダー（GFL）育成プログラムが設置された。まず、文部科学省の委託事業を発展させる形で、理工学部を中心に、医学部と連携して、平成25年（2013年）度から「医理工グローバルフロンティアリーダー（GFL）育成コース」が始まった。平成27年（2015年）度からは、教育学部と社会情報学部が連携して「教育・社情グローバルフロンティアリーダー（GFL）育成コース」が始まり、全学的な取り組みがスタートした[3]。

平成29年（2017年）度には、プログラムの企画・運営を統括する「グローバル人材育成推進委員会」が設置され、GFL育成プログラム要項が制定された。グローバルフロンティアリーダーを「自国及び他国の文化・歴史・伝統を理解し、外国語によるコミュニケーション能力を持ち、国内外において地球的視野を持って主体的に活躍できる人」と定義し[4]、要項では第１に趣旨として、「国際社会において活躍する独創的なトップリーダーを育成するため、日本語能力・国際理解を含む幅広い教養・外国語コミュニケーション能力の修得を中心とした教育を行うとともに、海外留学を経験し広い視野を身に付けさせることを目的としてグローバルフロンティアリーダー（GFL）育成プログラム（以下「GFLプログラム」という。）に関し必要な事項を定める」とした。第２に養成する人物像として、各学部学科、以下のように掲げられている。

（１）教育学部
学校教育の担い手として、国際的な視点から日本の教育を捉え、広い視野を持って活躍する者

（２）社会情報学部
社会情報学部の学際性を活かした裾野の長い「グローカル教育」を行い、世界に学び、それを地域に展開する能力だけでなく、地域の中に学び、それをグローバルに展開する能力を持つ者

（３）医学部（医学科）
医師、医学研究者又は医療行政担当者として、国際的視野を持ち、広く国際社会に貢献し得る者

（４）医学部（保健学科）
保健医療の担い手として、グローバル化した保健医療の諸課題に対応できる国際的視野を持つ者

（５）理工学部
理工学分野において、新しい領域を開拓する創造的プロジェクトのリーダーとして、諸外国の技術者・研究者と、専門分野に関して意思疎通を図りながら、協力して活躍できる能力を身に付けた者

GFLプログラムでは、教育学部と社会情報学部が連携した「教育・社情グローバルフロンティアリーダー（GFL）育成コース（教育・社情GFLコースと称する。）」と、医学部と理工学部が連携した「医理工グローバルフロンティアリーダー（GFL）育成コース（医理工GFLコースと称する。）」の２コースを設け、各学部学科ではそれぞれの選抜方法に沿って少人数の学生を選定し、上記のような人物になれるように学生を養成している。

## ３　教育学部GFLについて

教育学部のGFLプログラムは、「教育・社情GFLコース」の下で行われている。詳細の違いはあれど、「教育・社情GFLコース」では、所定の「行事」と「授業」を要件とし、その要件を満たした者をコース修了者として修了証書を授与する（なお、修了判定は、各学部の国際交流委員会が行い、認定は各学部長が行う）。「行事」とは「教育・社情GFLコース」独自の活動、「医理工GFLコース」と合同の活動、また群馬大学全体の国際交流を管轄している「国際センター」[5]での活動のことであり、具体的にはGFLコー

スの学生に特化したイベント、留学生へのチューター活動、留学などがあり、参加する行事の種類によって取得できるポイント数が異なる。なお、教育学部では４年間で行事ポイント数として15ポイント以上の取得が修了要件である。「授業」とは群馬大学で開講されている、主に国際交流関連の内容を扱う講義のことであり、具体的には外国語によるコミュニケーション能力を養う「選択英語」、国際理解を深める「国際理解基礎講座」などがある。なお、教育学部では４年間で授業単位数として８単位以上の取得が修了要件である。これらの「行事」と「授業」を通じて、学生はGFLとして資質・能力を高める。

ここで、教育学部GFLプログラムの詳細を募集要項に沿って確認しておく[6]。教育学部では、１年生全体で８名程度を募集人員としている（学部定員が220名（2020年度からは190名）であるから、約４％に該当する）。選抜方法として、入学時に受ける英語プレイスメントテスト[7]、TOEICあるいはTOEFLのスコア、前期成績（GPA）、志望理由書、面接を総合的に評価し学生の選抜を行う。志望理由書には氏名、学籍番号、所属専攻など学生の基礎的情報のほか、語学習得状況（ここにTOEICなどのスコアを記入させる）や海外渡航歴などの情報と、志望理由として「GFLコースを志望する理由、本コース在籍期間中にどういったことを修得し、それを将来どのように役立てていきたいかなど」を書かせる。面接は、複数名の国際交流委員と志願者１名による約10分間の個人面接で、志望理由書に沿って質疑応答が行われる。面接時には簡単な英語での受け答えも要求している。選抜日程として、まず例年５月最終週に説明会を開催し、新入生に対して、教育学部GFLプログラムについての説明や現役GFL学生からのアドバイスなどを行い、その際願書を配布し実質的に募集が始まる。次に、７月中・下旬までに志望理由書を提出させ、７月下旬・８月上旬にかけて面接を実施する。その後、TOEICあるいはTOEFLのスコアや前期成績（GPA）など他の情報も踏まえて、９月上旬までに国際交流委員会において合格候補者を選抜し、最終的に９月中旬の学部教授会において合格者を正式に決定する。

上記の選抜日程・方法に沿って、正式にGFLプログラムの合格者として選抜された学生はまず、９月下旬に２日間の合宿形式で行われる「グローバル交流セミナー・サマーセミナー」に参加する：「国立赤城青少年交流の家にて合宿研修を実施します。グローバル交流セミナーとして、本学の外国人留学生・大学院生などから、専門とする研究内容を英語で紹介してもらいます。また、コミュニケーション能力の向上を目的に交流プログラムを企画し、留学生との交流と英会話コミュニケーションを図ります」[8]。ここで初めて、他学部のGFLプログラムの合格者と顔を合わせるとともに、先輩GFL学生の留学体験記や若手研究者である留学生・大学院生の講演会などを通じて、群馬大学GFLプログラムについての理解を深めてもらう。次に、10月から基本的に毎週水曜日に開催される「スペシャルセミナー」に参加する。主な活動として、「Global Awareness: Exploring Culture and Society」と「特別講演会」がある。「Global Awareness」：「通常の英語授業とは異なり、グループワークや課題等を通して、海外の文化・習慣・社会・経済等について英語で学んでいくプログラム」；「特別講演会」：「学生が企画・提案し、一般学生等も参加可能な講演会」、「講師として、各界で活躍されている企業等のトップリーダーや先端研究に携わる研究者を招聘し、様々なテーマについて講演いただきます」。春季休業中である２月・３月にかけて、希望者だけではあるが、GFLプログラムに特化した「短期留学」が実施される：「海外留学に参加し、英語能力の向上を図るとともに、海外での生活を通して国際理解を含む幅広い教養・外国語コミュニケーション能力を伸ばしていくことを目的としています」。これは全学部共通のGFL限定特別留学プログラムであり、「海外の協定大学へ短期留学するプログラムです。約３～４週間の研修プログラムを実施します。現地の先端研究や企業・施設について学習できる各種見学会、現地大学の研究室訪問、現地教授による特別講義聴講、通常授業の見学等、学生の専門分野を意識した各種特別プログラムを実施します」。そして、翌年度の５月ごろに「成果報告会」に参加する：「前年度中に実施した活動の報告を行います。本学の学生のほか、GFL生の出身高校にも案内し、希望する教員・生徒の皆様にもご参加いただきます。また、企業人等の講演会を併催します」。これが新規生の主な活動であり、多くは全学部共通で実施される。２年次以降には学部独自のプログラムが始まり、例えば教育学部では社会情報学部と合同で「インテンシブ

イングリッシュ」を実施している：「教育学部と社会情報学部に関する専門英語の習得と英会話による英語コミュニケーション能力の向上を目的とした講座」である。

## 4　教育学部GFLのこれまで

本節では、前節のような教育学部GFLプログラムに実際に参加している学生に対して2018年度に実施したアンケートの結果を分析し、これまでのプログラム内容を振り返る。

まず回答者であるが、2015年度入学生（４年生）が８名中４名､2016年度入学生（３年生）が８名中７名、2017年度入学生（２年生）が７名中６名、2018年度入学生（１年生）が９名中９名であった。

次に質問項目について、当該アンケートは全学部共通で実施されたもので、全部で51項目あるが、ここでは主に教育学部生を対象とした17項目だけを分析対象とする。

以下、各質問項目の結果を挙げていく（なお、記述項目については理解可能な範囲で誤字脱字そのまま引用する）。

①【GFL履修授業の科目数について】GFL履修授業の科目数についてお答えください。（選択肢：多すぎる、やや多い、ちょうど良い、やや少ない、少なすぎる、授業を履修しなかった）

４年生：多すぎる（１）、ちょうど良い（１）、やや少ない（１）、授業を履修しなかった（１）

３年生：多すぎる（１）、やや多い（４）、ちょうど良い（１）、授業を履修しなかった（１）

２年生：やや多い（３）、ちょうど良い（１）、やや少ない（１）、少なすぎる（１）

１年生：多すぎる（４）、やや多い（１）、ちょうど良い（２）、少なすぎる（１）、授業を履修しなかった（１）

①の結果について、全体でみると、「多すぎる」が６名、「やや多い」が８名、「ちょうど良い」が４名、「やや少ない」が２名、「少なすぎる」が２名であり（ここでは「授業を履修しなかった」を除外）、修了要件としての授業科目数が多いと感じる学生が多いことがうかがえる。

②【GFL履修授業科目について】前項のように回答した理由を書いてください。GFL履修授業の科目数や内容などについて感想、意見などあれば記述してください。

４年生：「英語専攻は専門で被っている授業もあったのでちょうど良かったと思う。」、
「英語専攻に標準を合わせた履修数になっているように感じる。そのほかの専攻は、自分の専攻に加えて完全な＋αとして履修していかなければならないので、就活・卒論などと並行するのは難しいのではないかと感じる。」、
「必修の授業とかぶってしまうこともあるので、もう少し選択の幅が増えれば履修しやすいと思う。」

３年生：「１年前期から大まかに４年間の履修計画を立てる学生もいると思うので募集ガイダンスの中で早いうちからGFL必修単位を意識しておく必要があると感じた。」、
「教育学部は必修科目が多く、他の科目も取るとなると大変だから。」、
「それらの教科とGFLの活動の相互性が分からないから。」、
「単位が足らなかったために、時間割との関係から第２外国語を余分に履修した。勉強にならなかった訳ではないが、他に取りたかった授業もあったので残念だった。（単位数が超える、時間が重なっているなどの理由で履修出来なかった。）」

２年生：「専攻、副専攻の授業と研究がまだ多いから。」、
「二年生以降で履修できる授業が少ない。」、
「英語専攻でないと履修しないような科目が多く指定されていて、ほかの専攻のカリキュラムの範囲でも選択できるような授業を増やして欲しい。」

１年生：「教育学部は必修で取らなければいけない科目が多いのに、GFLの科目までとると、年間の単位数を超えてしまう。」、
「履修登録の関係上、一年時でとれなかった授業は該当する授業を４年時にならなければとれないようになっているため。」、
「一年の前期などに履修すべきものなど、GFLに入る前から知っていればよかったことなどがあった。」

修了要件としての授業科目数が多いと感じる学生が多いという①の結果に対して、②の結果は、修了要件としてカウントできる授業の種類や履修できるタイミングなどを工夫することによって改善が見込まれることを示唆している。

③【GFL行事ポイントについて】GFLの行事ポイント数（４年間で15ポイント以上）についてお答えください。（選択肢：多すぎる、やや多い、ちょうど良い、やや少ない、少なすぎる、行事に参加しなかった）

４年生：ちょうど良い（２）、やや少ない（１）、行事に参加しなかった（１）
３年生：ちょうど良い（６）、行事に参加しなかった（１）
２年生：ちょうど良い（６）
１年生：多すぎる（３）、やや多い（３）、ちょうど良い（３）

③の結果について、全体として、「多すぎる」が３名、「やや多い」が３名、「ちょうど良い」が17名、「やや少ない」が１名であり（ここでは「行事に参加しなかった」を除外）、修了要件としての行事ポイント数については適していることがわかる。

④【GFL行事ポイントについて】前項のように回答した理由を書いてください。GFLの行事ポイントや行事内容などについて感想、意見などあれば記述してください。

４年生：「留学してしまえば達成可能だから。」、
「特に困難なく獲得できた。」
３年生：「参加必須の行事に参加していればある程度ポイントが貯まるため特に変更する必要はないと感じた。」、
「留学に行くため、特に苦は感じなかった。しかし、自分のポイント数が分からなくなる。」、
「自分は留学に行くことが多いので、達成できましたが、この行事ポイント制度もよく分からなかったです。」、
「行事に参加していれば、苦なく取れた。」
２年生：「もう一年で達成したから。」、
「無理なく達成できそうだから。」、
「ちょうどいいと感じた。」
１年生：「ポイントに縛られずに、活動ができるのよいと思う」

ただ、④の結果からわかるように、修了要件としての行事ポイント数は妥当かもしれないが、４年間にわたって行事に参加しポイントを取得する必要があるような工夫を今後検討しなければいけないかもしれない。

⑤（４年生のみ）【GFL活動全体】〈国際社会において活躍する独創的なトップリーダーの育成〉４年間のGFL活動を通してどうでしたか?（選択肢：とても良かった、まあまあ良かった、どちらとも言えない、あまり良くなった、全然良くなかった、回答対象ではない）

まあまあ良かった（２）、どちらとも言えない（１）、回答対象ではない（１）

⑥（４年生のみ）【GFL活動全体】〈国際社会において活躍する独創的なトップリーダーの育成〉GFL活動に参加して、自分のどんな点が成長したと思いますか？

「本当に少しだけ視野が広くなったと思います。同級生にこんなに意識の高いやつがいるのかと感じられ、そういう人たちとの関わり方は身についたように思います。」、
「自分で企画して、周りの学生や教員の方とうまくやりとりできるようになった。」、

「GFL生であったからこそ、この５年間常に国際交流という意識を持って生活することができたのだと思う。実際、留学という機会もいただき、とても充実した日々を送ることができた。ただ２年次の活動などは、正直何をすればいいのか分からないというところはあった。１期生としての活動であったので、もっと積極的に自分たちから活動を提案していければよかったと感じる。」、

「様々な活動をしている友人をつくり、刺激を受けることで、視野が広がったと思う。」

⑦（４年生のみ）【GFL活動全体】〈国際社会において活躍する独創的なトップリーダーの育成〉GFL企画の中で、特に良かったと思うものを３つ、理由を添えて挙げてください。

「インテンシブイングリッシュ；Global Awareness；成果報告会」、

「global awareness：やることは多かったが、様々な学生と関わることができてよかった；サマーセミナー：色々なことを吸収できた；自主活動企画：予算もあてていただき、自分たちがやりたいことをアドバイスをもらいながらできてよかった。」、

「留学；１年次の英語の授業；成果報告会」、

「成果報告会：自分の専門ではない分野の話も聞けて興味深かった。かなり刺激を受けることができた；グローバル・アウェアネス：実践的な英語の授業が受けられてよかった；国際交流課主催 インターナショナルキャンプ：留学生と楽しく交流ができ、とても良い思い出になった。」

⑧（４年生のみ）【GFL活動全体】〈国際社会において活躍する独創的なトップリーダーの育成〉GFL活動で、改善したほうがよい点はありますか？もしあれば、どの企画をどのように改善した方がよいか具体的に書いてください。

「キャンパスが変わってしまうため仕方ないが、医理工との距離やGFLの重さの違いをすごく感じ、劣等感があった。」、

「学生間で自主活動企画についてもう少し詳しく共有した方がいいと思う。自主的な活動を促すことも必要だが、学生の多くは受け身の学生も多いため、先輩が後輩にアドバイスする機会を増やしたり、教員から企画の立て方などの指南があったらもっと自主活動を行う機会が増えたのかなと思う。教育GFLは３年以降なにも大きな活動がないため、自主活動をもっと促してもいいかなと思った。」、

「英語専攻以外の履修数、留学生との交流（スタディサポーター制度の充実）、成果報告会のポスター発表の時間管理、活動提案しやすい環境づくり（会議の場を用意するなど）」、

「１年次を終えるとあまり活動がなかったように感じるので、高年次ももっと全体での活動があるといいなと思う。」

⑨（４年生のみ）【GFL活動全体】〈国際社会において活躍する独創的なトップリーダーの育成〉全体としてGFL活動について感想や意見などあれば自由に書いてください。

「教育学部GFLの一期生として、こうしたコミュニティに参加する機会がまずあったことが嬉しかった。」、

「GFLに入って、自主活動や授業等を通して、自分に企画力・発言力・コミュニケーション力等がついてきたのが分かった。受け身だったら得たものは少なかっただろうが、能動的だったからこそ、たくさん失敗を繰り返して多くを学ばせていただいた指導していただいた先生方・職員の皆様に感謝しています。」、

「GFLに入って本当に良かったです！意識の高い学生の皆さんや、様々な国籍の人と出会って、これまで分からなかった自分の良い点にも改善点にも気づくことができました。お世話になった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。これからの生活でもGFLで学んだことを生かしていくだけでなく、何らかの形でGFLに関わっていけたら嬉しいです。本当にありがとうございました。」

⑤～⑨の結果からわかるように、教育学部GFLプログラムを４年間経験した学生にとって、当該プログラ

ムは概ね充実したものであることがうかがえる。

⑩（３年生のみ）【GFL３年生を振り返って】３年生としてのGFL活動は充実していましたか？（選択肢：とてもあてはまる、まあまああてはまる、どちらとも言えない、あまりあてはまらない、全然あてはまらない、回答対象の学部・学年ではない）

まあまああてはまる（１）、どちらとも言えない（３）、あまりあてはまらない（１）、全然あてはまらない（２）

⑪（３年生のみ）【GFL３年生を振り返って】前項のように回答した理由を書いてください。修了要件の授業単位と行事ポイントは無理なく取得できていますか？教育学部GFL活動について改善点などあれば教えてください。

「教育実習等でGFL活動に積極的に取り組めなかったから。」、

「同期のGFL生との交流が図れ様々な方面での活躍を聞くことができてよかった。」、

「３年生は特に活動に参加しなかったため。」、

「教育実習などがあり忙しかったこともあるが、自主的に活動に参加する意欲がわかなかった。修了用件の単位については、大学の勉強、サークル活動、バイトなどもあり、すべてを両立させることは難しいと感じた。」、

「GFLとしての活動は何もしていないから。ただGFLを修了するために必要単位を取らないといけないことに納得していなかったから。」、

「実習などもあり、あまり積極的な活動はできなかった。」

⑩と⑪の結果から、教育学部では３年次、特に後期は教育実習が入ってしまうため、GFL学生としての活動が制限されるため、３年生の充実感は低いことがわかる。

⑫（２年生のみ）【GFL２年生を振り返って】２年生としてのGFL活動は充実していましたか？（選択肢：とてもあてはまる、まあまああてはまる、どちらとも言えない、あまりあてはまらない、全然あてはまらない、回答対象の学部・学年ではない）

まあまああてはまる（１）、どちらとも言えない（１）、あまりあてはまらない（２）、全然あてはまらない（１）、回答対象の学部・学年ではない（１）

⑬（２年生のみ）【GFL２年生を振り返って】前項のように回答した理由を書いてください。修了要件の授業単位と行事ポイントは無理なく取得できていますか？教育学部GFL活動について改善点などあれば教えてください。

「忙しかったから。」、

「忙しくてあまり活動できなかったから。」、

「学業がかなり忙しくGFL活動をする時間を全く確保できなかった。」、

「成果報告会やグローバルセミナーなどに参加する中で新たな学びがあったから。」

⑫と⑬の結果は、どの学部にも当てはまることだが、２年次になり専門科目の授業が多くなり学習負担が１年次のそれよりも増すため、GFL学生としての活動との両立が難しいことがうかがえる。

⑭（１年生のみ）【GFL生になってみて】群馬大学に入学する前からGFLコースに入ろうと思っていましたか？（選択肢：とてもあてはまる、まあまああてはまる、どちらとも言えない、あまりあてはまらない、全然あてはまらない、回答対象の学部・学年ではない）

まあまああてはまる（２）、全然あてはまらない（７）

⑭の結果は、大学入学前の群馬大学GFLプログラムの認知度がまだまだ低いことを示唆している。

⑮（１年生のみ）【GFL生になってみて】学業とGFL活動を無理なく両立できていますか？（選択肢：とてもあてはまる、まあまああてはまる、どちらとも言えない、あまりあてはまらない、全然あてはまらない、回答対象の学部・学年ではない）

とてもあてはまる（3）、まあまああてはまる（3）、どちらとも言えない（2）、全然あてはまらない（1）

⑯（1年生のみ）【GFL 1年生を振り返って】1年生としてのGFL活動は充実していましたか？（選択肢：とてもあてはまる、まあまああてはまる、どちらとも言えない、あまりあてはまらない、全然あてはまらない、回答対象の学部・学年ではない）

とてもあてはまる（3）、まあまああてはまる（4）、どちらとも言えない（1）、全然あてはまらない（1）

⑰（1年生のみ）【GFL 1年生を振り返って】前項のように回答した理由を書いてください。修了要件の授業単位と行事ポイントは無理なく取得できていますか？教育学部GFL活動について改善点などあれば教えてください。

「教育学部社会専攻は必修科目が多いので、1年生ではGFL指定の授業単位が取りきれなかった。また、前期の履修が組み終わった後に指定の授業を言われても対応できない。」、

「終了要件の授業単位を取得できていないので、高学年になってから取ろうと思っているが、小中の教員免許の他に高校と幼稚園の免許もとろうとしているので、厳しそう。」、

「四年時にポイントを獲得できるように頑張りたい。」、

「授業履修は英語専攻以外は不利」、

「留学やボランティアだけでなく、発展途上国にバックパッカーとしていくのもとても良い体験になると感じたので、そういうものも、留学や、ボランティアと同等に扱ってほしい。」、

「私は英語専攻なので、必修の科目がGFLの単位とかぶっているのか、無理なく履修することができています。」

⑮〜⑰の結果からわかるように、1年次はGFL活動への充実度が高い。

## 5　教育学部GFLのこれから

本節では、前節のアンケート分析を踏まえて、教育学部GFLプログラムの今後の課題と改善策を検討する。

課題1．修了要件としての「授業」について

アンケート項目①と②の結果から、教育学部GFLプログラムの修了要件である「4年間で指定された授業の中から8単位以上を履修」は、現状、多くの学生にとってハードルが高いようである。改善策として、認定する授業科目の種類を増やしたり、認定する授業科目が各年次の必修科目と重ならないように工夫したりすることが考えられる。

教育学部には、国語専攻、社会専攻、英語専攻、数学専攻、理科専攻、技術専攻、音楽専攻、美術専攻、家政専攻、保健体育専攻、教育専攻、教育心理専攻、障害児教育専攻の13専攻ある。これまでの教育学部GFL生の所属専攻をみてみると、2015年度入学生は国語専攻1名、英語専攻6名、数学専攻1名、2016年度入学生は英語専攻2名、数学専攻2名、音楽専攻1名、保健体育専攻2名、教育専攻1名、2017年度入学生は英語専攻4名、理科専攻2名、保健体育専攻1名、そして2018年度入学生は国語専攻1名、社会専攻1名、英語専攻4名、数学専攻1名、理科専攻1名、家政専攻1名である。全体でみてみると、国語専攻2名、社会専攻1名、英語専攻16名、数学専攻4名、理科専攻3名、技術専攻0名、音楽専攻1名、美術専攻0名、家政専攻1名、保健体育専攻3名、教育専攻1名、教育心理専攻0名、障害児教育専攻0名である。「GFL」と聞くと、学生にとっては「英語」というイメージが強いのか、これまで教育学部ではGFL生の多くが英語専攻所属であった（計32名中英語専攻生が16名であり、実に50％である）。またアンケート項目②の結果から、学生にとっては、英語専攻生が履修しやすい授業が修了要件としての授業として認定されている、というような印象があるようである。実際には、国際交流委員会で調整し、専攻によって不平等にならないように認定授業を選定してはいるが、国際交流関係の授業となると英語専攻生向けの授業となることが多いというのは事実である。どの専攻の学生がGFLプログラムに入ってきたとしても無理なく履修できるよ

うに、修了要件として認定する授業を選定する必要がある。

なお、2019年度のサマーセミナーのガイダンスにおいて、学生が「GFLの活動目的に合致する」と判断した授業について、国際交流委員会で承認されれば、追加で要件に含めることができる可能性があることについて周知した。本稿の執筆時点では、１件の申し出があり、国際交流委員会で承認されており、修了要件については一部、改善が進みつつある。

課題２．修了要件としての「行事」について

教育学部のもう一つのGFL修了要件は「４年間で各種行事に参加し行事ポイントを15ポイント以上取得」であり、アンケート項目③と④の結果からわかるように、この修了要件は適切なようである。しかしながら、１年次に15ポイントを達成できてしまう、という意見もあり、あくまで４年間をとおして教育学部としてのGFL学生を育成するためには、各学年で必須の参加行事を創設するなどの改善が今後必要である。もう一つ考えるべきは、各種行事に対して付与するポイント数の見直しである。例えば、募集要項をみてみると、参加必須行事があるにせよ、長期の１年間の留学には15ポイントが付与されることになっている。つまり、最低限参加必須行事に参加し、長期の１年間の留学をしてしまえば、４年を経たずとも修了要件を満たしてしまうことになる。改善策としては前述のように各学年に参加必須行事を設けることもそうであるが、各種行事参加に対するポイント数の見直しも有効であると考えられる。

課題３．各学年の充実度について

アンケート項目⑤～⑨の結果から、４年生のGFL活動への充実度は概ね良いと考えられる。他方、アンケート項目⑩と⑪の結果から３年生の充実度、アンケート項目⑫と⑬の結果から２年生の充実度はともに低いことがわかる。そしてアンケート項目⑮～⑰の結果から、１年生の充実度は高いと評価できる。このような学年間の充実度の差異について、主な要因として２つ考えられる。一つは教育学部独自の問題であり、もう一つはGFLプログラム独自の問題である。教育学部独自の問題とは、これは教育学部に限った話ではないが２年次になると専門科目の授業が増え、結果的に学習負担が１年次よりも増す。そのため、２年次にはGFL活動との両立が１年次よりも難しくなる。また、教育学部では３年次に教育実習があるため、実質的に後期はGFL活動をすることが難しい。GFLプログラム独自の問題とは、教育学部では主なGFL活動が１年次に集中してしまっている。このような２つの要因から、１年次は比較的他の事とGFL活動を両立させやすく、なおかつGFL活動が豊富なため、充実度が高いが、２・３年次はGFL活動が減るとともに、専門科目の授業や教育実習の関係から自主的にGFL活動をすることが難しく、充実度が下がってしまう。ただ、４年生の充実度の高さから、４年間をとおして教育学部GFLプログラムは満足できるものと学生から捉えられているのであれば、２年次以降のGFL活動を改善していくことによって、より良いプログラムを形成できると考えられる。具体的には、２年次以降の学生の授業や実習の負担を考慮して、各学年で無理なく参加できる必須の行事を創設するなどの工夫が考えられる。

課題４．入学前の群馬大学GFLプログラムの認知度について

アンケート項目⑭の結果から、回答数は少ないものの、入学前の群馬大学GFLプログラムの認知度が低いことがうかがえる。安定的に新入生から８名程度の定員を選抜できるようにするためにも、教育学部GFLプログラムの戦略的な宣伝が必要である。具体的には、独自のホームページを立ち上げ、成果をリアルタイムで報告し、高校生に教育学部GFLプログラムのより良い周知を図っていくことが考えられる。

課題３で挙げたように、これまでの教育学部GFL生の所属専攻をみてみると、13専攻について、国語専攻２名、社会専攻１名、英語専攻16名、数学専攻４名、理科専攻３名、技術専攻０名、音楽専攻１名、美術専攻０名、家政専攻１名、保健体育専攻３名、教育専攻１名、教育心理専攻０名、障害児教育専攻０名である。専攻毎に偏りがあることと、専攻によってはこれまでGFL生がいないことがわかる。教育学部全体でGFLプログラムを盛り上げていくためにも、学外への宣伝だけでなく、入学してからの学内への宣伝、特にこれまでGFL生が出ていない、あるいは少ない専攻への宣伝が必要である。

## 6　おわりに

本稿では、教育学部におけるGFLプログラムの現状を現役学生へのアンケート結果から分析し、今後の課題と改善策を検討した。アンケート結果の分析から、主に４つの課題（修了要件としての「授業」について、修了要件としての「行事」について、各学年の充実度について、入学前の群馬大学GFLプログラムの認知度について）が存在することが明らかになった。各課題に対する改善策をいくつか提案したが、今後もさらなる改善策を模索し、プログラムの充実を図っていく。例えば、回答者の所属専攻を考慮して、アンケートを分析することで、より細かく課題を把握することが可能になり、より具体的な改善策を模索することができるだろう。また、教育学部では「学校教育の担い手として、国際的な視点から日本の教育を捉え、広い視野を持って活躍する者」をGFLとして養成する人物像としているため、実際の修了生がプログラムを経てそのような人物像に近づくことができているのかどうかを修了生へのアンケートを実施するなどして、今後点検していく必要があるだろう。本稿が教育学部GFLプログラム、延いては全学のGFLプログラムのさらなる発展のきっかけとなることを期待する。

### 謝辞

本稿を査読いただいた方にこの場で感謝申し上げたい。いただいたコメントをもとに改訂したが、他の誤りの一切は著者に帰す。

### 註

1　http://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/koubo/06122815.htm（2019年10月20日参照）
2　http://www.tech.gunma-u.ac.jp/FLC/index.html（2019年10月20日参照）
3　http://www.st.gunma-u.ac.jp/GFL/index.html（2019年10月20日参照）
4　https://gfl.jimu.gunma-u.ac.jp/gfl（群馬大学国際化推進基本計　画（http://www.gunma-u.a c.jp/data/images/aboutus/kokusaikihon.pdf）も参照のこと）（2019年10月20日参照）
5　https://www.guic.gunma-u.ac.jp/（2019年10月20日参照）
6　https://gfl.jimu.gunma-u.ac.jp/wp-content/uploads/2019/03/2018-GFL-Guidelines-faculty-of-Education.pdf（2019年10月20日参照）
7　群馬大学教育学部では、入学時に英語プレイスメントテストを行い、習熟度別クラス編成による教養英語を開講している。
8　各種活動内容については、https://gfl.jimu.gunma-u.ac.jp/katsudo（2019年10月20日参照）

（やまだ　としゆき・すずき　ごう）